

# 岐阜同朋 ぎふどうぼう

- 南無阿弥陀仏—慈光会に想う—(林 芳美)
- 教如上人御旧跡探訪記① ● コラムしょうしんげ
- 美濃門徒の昔話 西入坊のへび女房～蛇骨縁起～
- 一枚の寫眞の記憶 —のすたるじっく・ふおと—

# 110



教如上人 隠遁の地

岐阜県郡上市明宝西気良

## 一枚の寫眞の記憶

—のすたるじっく・ふおと—

「お念仏の開法に、宗派寺院の壁はない」と、慈光会のお世話役を生涯勤められた故・浅野進さんの口癖でした。

慈光会は、毎月、数カ寺で定例の開法会が開かれ、それに加え、会員の方々皆で各地・各寺の報恩講などの仏事に積極的に参拝されています。

その御講師は、浩々洞(清沢満之主宰)の直系である、暁烏敏・金子大榮両師から現在まで、脈々と受け継がれています。「今月は、岐阜で金子大榮先生と暁烏敏先生の法座、来月は北陸へ曾我量深先生の開法会に皆で……」等々、矢継ぎ早の広域法座開講で「岐阜に慈光会有り」とその存在を知らしめ、一説では「同朋会のモデルになった」とも。

一昨年の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌にあたり、我が同朋会運動の総括は行われたのでしょうか？

果たして、全人類に開かれた壁の無い開法の場の具現は成し得ていたのか？……

慈光会は、今も世話役が何代も引き継がれ、「開法の場」を開いています。



1950(昭和25)年

岐阜市大門町・上宮寺

①金子大榮師 ②金子夫人 ③上宮寺前々住職 ④上宮寺前住職 ⑤上宮寺前坊守

### 編集後記

昨年、本山出版部より発行された「別院探訪」という本をご存じでしょうか？

この本は大谷派の全国、また海外の55別院を紹介しているのですが、その冒頭に、「……四季にわたる木々の彩りも美しい。……教化の息吹と癒しに接することができる。……それは地域の門徒にとっても訪れる一般参詣者にとっても、楽しみと親しみに満ちた新しい機縁との出会いとなる。さあ、今からでも別院を訪ねてみませんか」という監修者の言葉があります。

これを読んだとき、「はたして自分たちは、そんなお寺になっているのだろうか？」と考えました。

街なかの寺院では、山門をくぐった瞬間に、セキユリティが作動する所もあるそうです。物騒になったとはいえず、世知辛い世知辛い世になったものですね。(松)

岐阜教区 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要 2014年4月26日(土)~29日(火・祝)

発行：岐阜教区教化委員会 真宗大谷派岐阜教務所 橋 秀憲 〒500-8054 岐阜市大門町1 TEL.058-266-1378 編集：岐阜同朋編集委員会

本誌に関するご意見・ご感想をお待ちしております。

# 南無阿彌陀仏

## 慈光会に想う

岐阜には百年近く続いている慈光会という開法会があります。このすばらしい開法の歴史を後世に残したいから書いて欲しいと上宮寺様から御依頼を受けました。九十一歳にもなり愚老の身ですが、お引き受け致しました。よろしくお願ひします。

慈光会の発足は大正何年からか分かりませんが、求道心に燃えた方々が大門町上宮寺に集い、開法会を結成されました。御住職は改革派で格腹の良い方でした。主だった人は浅野進さん、廣瀬団一さん、向川さん、松原忠次郎さん、その他多くの方々です。

浅野さんが代表でお世話下さっていました。曾我量深先生が慈光会の名付け親で、その喜びの記念に「思い出」という冊誌を出されたそうです。

明治の時代、日本国存亡の時期に宗教界では清沢満之先生、

1970 (昭和45)年頃 本山同朋会館前



高原寛正師 柘植蘭英師

お話を聞いていました。学生の頃、叔母の部屋で書棚の本を読んでいたら、ちょうど先生のお説教の言葉が聞こえてきて、それが心に響きました。

それから仏様の教えを聞こうと思い立ちました。結婚して岐阜に住むようになり、1950 (昭和25)年頃、曾我先生が長良の雄總のお寺へおいでになった時です。お詣りしての帰り、赤兎を背負って歩いている私に柘植先生が言葉掛けてくださいました。それが先生との出会いでした。その時の曾我先生のお話は

曾我量深先生、晚鳥敏先生、金子大榮先生、鈴木大拙先生、安田理深先生等、すばらしい先生が世に出て下さいました。

金子先生は一時期教団を追放させられ、曾我先生は大谷大学学長を解職に遇われた時なので、慈光会へ来て頂いたのかと思います。金子先生は羽織袴のお姿でした。大勢の方々が集近から、先生のお徳を慕って参集され、廊下や内陣までいっぱいの時もありました。また、お弟子の先生方も多く慈光会にご縁ができました。



1958 (昭和33)年頃 相応学舎 (京都市)

二つの世界であったことを覚えてあります。二つは浄土と穢土の事だと思えます。慈光会を意識したのはこのことがあつたからだと思えます。私が背負っていた女の子は数え三歳の時、親の不注意の事故で亡くなりました。

岐阜へ曾我先生がお出でになった時、先生はいつも一緒にお詣りしていた近くの伊藤さんの家にお泊まりになりました。夜私も招いてくださり、浅野さんとご家族の数人でした。お話を聞かせて頂く中で、先生は、手を胸に当て、何度も「ここに法蔵菩薩は常に在します。」と身をもつて教えて下さいました。私の一生の忘れ得ぬ教えです。

私はこうして慈光会やご縁のある先生方にお育て頂き、お友達の皆様にお世話になって、この年齢まで生かさせて頂きました。しかし、長い開法のご縁を頂きながら、はからいばかりで、聞こえてなかつた事をこの頃になって知らされます。私は若い頃から「信心獲得」回

不確かですが、上宮寺では、仲野良俊師、吉田龍象師、宮戸道雄師、柘植蘭英師は長期続き、廣瀬惺師も15年以上毎月来て下さいました。他に加納の雲端寺では、藤原鉄乗師その他の先生方、また森智誠師の「化身土」(安田理深師著作)の講義は20年位続いています。鷲山の安藤芳流師(画家)の所には西村見暁師が来られました。前一色上宮寺では高原寛正師、米澤英雄師、児玉暁洋師は20年以上現在も毎月続いています。また、加納菊地町の西

私の慈光会との関わりを述べます。私の生家の祖父母は田舎の小作農で明治末期に町へ出て、商売を始め、多少の財を得たようです。私が産まれる前に悲しいことがあつたので故祖父父母が説教所を建てました。叔母が跡を継ぎ、叔母の家に隣接する我が家は報恩講の時などに使用してあります。当時日曜学校が盛んで、私は幼い時からお経を習い、

心はどうしたら得られるのかという、願ひをもって開法してききました。教えは頭で一応理解しても実感が湧かない、紙一重が分からない苦しみを長い間もち続けてきました。

- 曾我先生のお言葉です。
- (一) 廻心というのは、「飛び込み型」と「いつとはなし型」とある。どちらかに決めてしまわねばならぬことはない。私のような愚鈍な者は「いつとはなし型」であります。ご苦労がかかっている身です。
  - (二) 廻心という事は只一たびあるべし、人によつて廻心はない事はない。然し私が固執することではない。常に今を生きている阿彌陀経の如し、「今現在説法」。私の立場は信の一念願ひの思召し一つを聞くのだ。

金子大榮先生

この歳になつてようやく今まで信心を得て、安心しようなんて思つてきたことは、何と傲慢不遜

厳寺(本願寺派)での八神正信師も20年以上現在も続いています。米野の正浄寺(森智誠師)の所では、安田理深師の御法話がよくあり、1982 (昭和57)年で還浄なさいました前日まで来て下さいました。

それから、今から50年前同朋会運動が全国的に広がり、僧侶の方々が本山で座り込みの抗議デモをされた話を聞きました。宗教心が燃え上がった時だと思ひます。写つている当時の写真を見るにつけ、その熱意が伝わってきます。

私は慈光会にご縁を頂き多くの師や友の導きを頂き、この道一筋に歩んでこられました。これは不思議というほかになくただ、有難く南無阿彌陀仏と申すほかありません。

最後に私が祖先から願われた様に、仏様の教えが子や孫に伝わつて欲しいと願うばかりです。拙い文ながら表白のご縁を賜りました事、厚く御礼申し上げます。

合掌

林芳美

※当日聴聞しておられた方の話「先生は講義中、咳がひどくお声が出ない様子でしたが、翌日お亡くなりになるとは、大変な驚きでした。」(1982 (昭和57)年2月19日命終・満81歳)

# 教如上人御旧跡探訪記①

郡上編



**第12代・教如上人(1558~1614)**  
 1558年第11代顕如上人の長男として誕生。  
 10年間にもおよぶ「石山合戦」では、本願寺を死守しようとする僧侶・門徒らの思いに共感し、織田信長と徹底抗戦する。顕如上人の死後本願寺住職となるが、豊臣秀吉の命令により弟の准如にその職を譲ることとなる。隠退してからは「正信偈」「和讃」「御文」を開版するなど、上人を支持する門徒に対し独自の教化を進めた。徳川家康から京都東六条の土地の寄進を受け東本願寺を創立。以後、教化拠点としての御坊(別院)を多く建立するなど、現在の大本願寺の礎となる体制を確立。  
 1614年に享年57歳で示寂。

皆さんは、教如上人という方をご存じでしょうか？我が東本願寺の創立者であり、親鸞聖人から数えると十二代目にあたる方です。  
 上人の生涯は、戦国乱世に生を受け、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という天下人とわたりあり、まさに波乱万丈の56年でありました。

このような時代背景も関係してか、その人柄については戦国武将的でないイメージが先行することもあり、聖人が残された本願念仏の教えを絶えずことなく伝え、聖人の御真影を安置する本願寺を護持相續することに尽くされたことは、異論を差し挟まないことでしょうか。今年、上人の四百回忌にあたり、本山・東本願寺をはじめ各地において法要等が勤まられます。そこで、今号より教如上人の足跡を訪ね歩いてみようと思いついたのですが、その中でも、この岐阜の地にゆかりのある御旧跡を歩いて、上人の功績に思いを馳せてみることにしました。



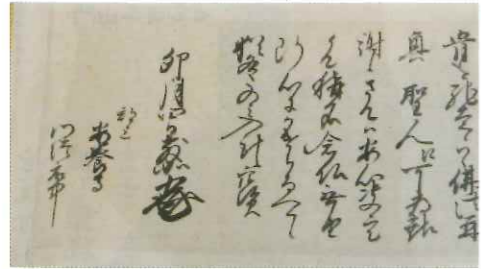
教如上人住居跡 郡上市明宝西気良

気良では、里人が古くからこの地を「教如屋敷」と伝えて保存してきた。大坂石山合戦のあり、本願寺教如上人が八代八右衛門の案内により、織田信長の害を避け、一時ここに隠れ住んだという。  
 石山合戦の顛末を記した『鷲森旧事記』によると、石山本願寺を退去した教如は信長の探索を逃れ、美濃郡上郡の八代八右衛門方に浪人の風体で身を寄せ、山上源太夫と称したという。里人の伝承が本願寺の記録を裏付けられたことになる。  
 信長は、1580(天正8)年3月、本願寺と石山退去を条件に講和するが、法嗣の教如上人は同意せず徹底抗戦の構えをみせた。同年8月についに講和に応じるが、流浪の身となった上人の動きに警戒を緩めなかったのである。

上人23~24歳頃は「流浪期」とも言われ、各地を転々としていたようです。近年の研究ではその地域がほぼ明らかになっており、大和(奈良県)、湖東(滋賀県)、越前(福井県)、大野から九頭竜湖、そして美濃(岐阜県)白鳥へ向かいました。そこから南下すると郡上八幡へ、北上すると越中(富山県)五箇山・城端へと抜ける道があり、「越前街道」といわれていますが、その周辺地域には、上人を支える門徒衆が存在していたようです。

そこで第一回目となる今号では、前述の郡上方面にスポットを当て、明宝に残る「住居跡」と、八幡町の安養寺さんにある資料館に足を伸ばしてみました。  
 ◆  
 二月の郡上はとても寒く、まだまだ雪が積もっていました。最初に訪れた郡上明宝に残る「教如上人住居跡」へは、道に迷いに迷ってようやくたどり着くことができました。見渡すかぎり山、山、山で本当に何もありません。もう石碑のみで、このあたりで

◀教如上人檄文(部分)『急度伺候』……1580(天正8)年



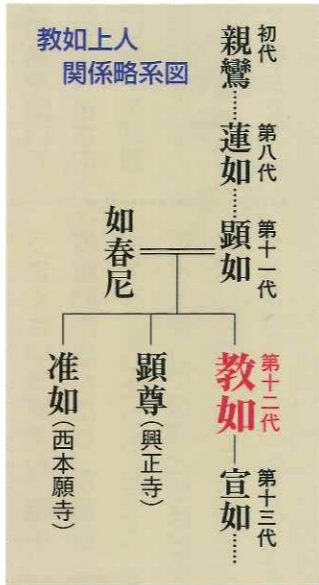
その信長が戦国乱世を統一する過程で最も抵抗した勢力が本願寺でした。信長は近畿周辺地を次々と攻略し、大坂の本願寺には種々難題を押しつけてきました。最初はそれに応えていたの

ですが、大坂の石山本願寺の土地そのものを要求してきたため、それを拒否。本願寺は、足利義昭を中心にして甲斐の武田、近江の浅井、越前の朝倉、安芸の毛利と信長包囲網を築き信長と戦うことを決意しました。そして1570年に有名な石山合戦へと突入していきます。時の法主である顕如上人は全国の門徒衆に決起団結をうながす「檄文」を送ります。この「檄文」が、今回私たちが訪れた郡上八幡の安養寺に保管・展示されています。

また、第十代安養寺住職の乗了は、教如上人からも信頼されていたようで、石山合戦時の活躍もあり、教如上人が裏書をされた「大谷本願寺親鸞聖人傳繪」(四幅)が下付されました。

さて、石山合戦は10年もの間続きましたが、本願寺は万策尽きて和議を結ぶことになりました。信長が示した七カ条の講和条件には大坂の本願寺を手放すことも含まれておりましたが、父の顕如上人はやむなく受諾し退去しました。対して、教如上人は和議を交わしたものの、本願寺を死守すべく自らの命を懸けて戦う門徒衆の存在と、「信長は勅命による和議であっても平然と裏切る人物」という大坂退去

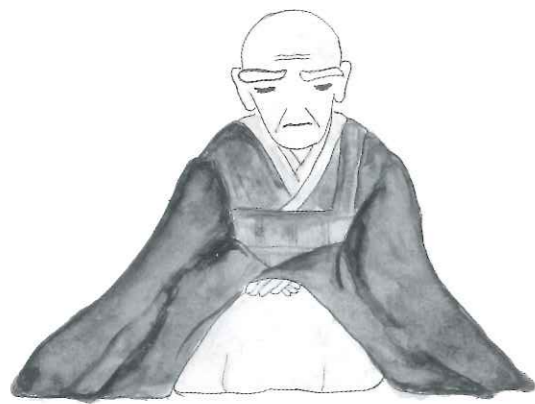
生活している方には申し訳ないですが、なぜ教如上人はこの地に隠れて生活しなければならなかったのでしょうか。



その裏書は教如上人流浪中のもので、「釋教如(花押)」の署名があります。さらに、この絵伝は狩野山楽が描いたものだそう、400年以上経った今もなお、克明緻密で見事な絵伝です。

その裏書は教如上人流浪中のもので、「釋教如(花押)」の署名があります。さらに、この絵伝は狩野山楽が描いたものだそう、400年以上経った今もなお、克明緻密で見事な絵伝です。

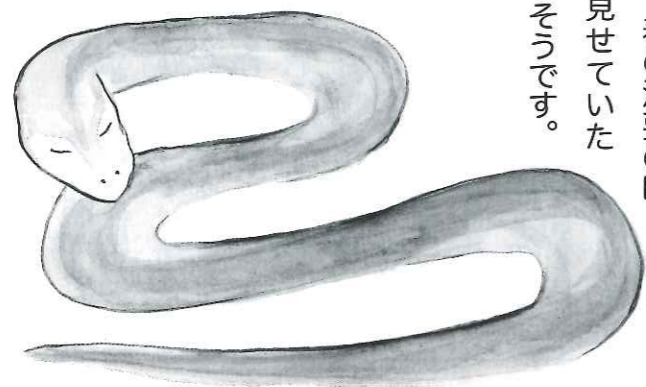
さて、石山合戦は10年もの間続きましたが、本願寺は万策尽きて和議を結ぶことになりました。信長が示した七カ条の講和条件には大坂の本願寺を手放すことも含まれておりましたが、父の顕如上人はやむなく受諾し退去しました。対して、教如上人は和議を交わしたものの、本願寺を死守すべく自らの命を懸けて戦う門徒衆の存在と、「信長は勅命による和議であっても平然と裏切る人物」という大坂退去



「ごえんさま、私は今日までの命なのです。私は悪いことをしたわけではないのです。が、生まれてからずっと人から恐れられ、嫌われてきました。初めのうちはどうしてかわかりませんでした。私が生まれるずっと



「はい。私はこうして、ごえんさまの教えを聞くときだけこのように美しい姿になれるのです。普段は驚くほど見にくい姿なんです。」  
 「おまえさんはそうも若くて美しいのになんで恐れられたり嫌われたりするんやな。」  
 「美しい姿になれるのが7日間の約束であり、今日が最期で、自分の身がらをお寺の隅に埋めてほしい」と告げた。  
 次の日、朝早く起きた行念さんの目に飛び込んできたのは、門の前に横たわっ



【河野西入坊の所在地】各務原市中屋町2丁目117番地の1

【参考文献】かかみがはらの「むかしばなし」各務原市小学校国語同好会・編（かよう出版）

美濃門徒の昔話

西入坊のへび女房 蛇骨縁起

昔、「河野西入坊」に行念という情の深いごえんさまがおったそつだ。ある秋のこと、行念さんが村人たちにありがたいお経のお話をしていると、色の白い美しい娘がやってきた。その娘は、次の日もその次の日も毎日やってくるのである。行念さんは、娘にわけを尋ねてみると、

昔に何かとんでもない悪いことをした報いに違いないと思うようになったのです。ですから、ごえんさまの教えにおすがりして少しでも罪を許していただきたいと思いついてお参りをしているのです。」

た身の丈およそ9尺（およそ3メートル）ほどもある大蛇のながらがらであった。「人の姿をしとらんだけで、悪いことなど何もしたらんのに。」  
 行念さんはそう思い、娘の願い通り、その骨を納骨堂の下に埋めてやったという。

この大蛇のお話は、この地域の人たちによって、大切に語り継がれているそうです。大蛇の骨は河野西入坊に納められていて、春の法要の時には、見せていただけるそつです。



安養寺山門

を反対する声に後押しされ、籠城し徹底抗戦することを決意します。もちろん、教如上人一人で籠城を強行したわけではなく、郡上安養寺に代表されるように、これらを支持する末寺や門徒衆、本願寺家臣団が多数存在していました。しかし、蓮如上

大坂本願寺を信長に手渡したくないという思いもむなしく、1580年8月に教如上人は大坂を退去します。そしてここから、信長の追っ手から逃れるため、約2年間の教如上人の「流浪期」が始まるのです。

て身を隠していたようです。この時の教如上人は何を思い、何を考えておられたのでしょうか。その後、教如上人は東本願寺を創立されるわけですが、創立後は全国各地に教化拠点となる御坊（別院）を建立し、地方の御門徒に真宗の正しい教えが相続されるように積極的に布教活動を行います。親鸞聖人が越後に流罪となり、「いし・かわら・つぶ

て」の田舎の人々と出遇ったように、教如上人にもこの「流浪期」に大坂や京都では経験しえなかった、田舎の人々との出遇いがあったのです。

しょうしんげ

能発一念喜愛心（よく一念喜愛心の心をほつすれば、不断煩惱得涅槃）  
 「二次元恋愛」が女性を中心に大流行しているそつです。スマートフォンなどを使つての恋愛ゲームのことです。ゲームの中の男性は超イケメンで、自分がそうして欲しい時に、優しく声をかけてくれ、自分の愚痴を聞いてくれ、ぎゅっと抱きしめてくれる…。まさに理想の男性であり、自分の思い描いた理想の恋愛ができるのが人気の秘密です。

ところが、ゲームの世界…と思つては大間違い。そこには、本気の恋愛があるのです。彼女たちにたかが、ゲームの世界…と思つては大間違い。そこには、本気の恋愛があるのです。彼女たちに



「三次元恋愛」も流行するといいいのですが…。